



# 動物たちと人の社会



新年あけましておめでとうございます。今年も図書館をよろしくお願ひします。

さて、今年の干支は「亥」、つまりイノシシですね。イノシシと言えば日本の里山にたくさん棲んでいて、牡丹鍋などが親しまれていますが、その一方で農作物の被害や噛みつかれて怪我をするなどの人的被害も多く発生しているそうです。中でも神戸市はイノシシによる人的被害が日本一多い自治体だそうです。六甲山系などの山林と都市が極めて近くに隣接していることによるものでしょう。昨年には、松蔭の近くにイノシシが出没したという話もありました。神戸に住む私たちにとって、野生動物と人間社会の共生は、誰もが考えていかなければならない身近な課題と言えます。

さて、今回紹介する『クマにあったらどうするか～アイヌ民族最後の狩人 姉崎等～』（姉崎等・片山龍峯 ちくま文庫 2014年）は、イノシシと同様、日本に古くからいる野生動物であるクマについての本です。本州にはツキノワグマ、北海道にはヒグマがいて、それらはいずれも人里離れた山深い場所に棲んでいると思われがちですが、実際には集落にほど近い里山の周辺に多く暮らしている身近な動物なのだそうです。この本は、そんなクマを相手に猟師として生きてきた姉崎等さんのこれまでの体験を、インタビューしてまとめたものです。間近に観察してきた者にしか分からないクマの意外な姿なども語られていて、興味深く読むことができます。

アイヌ最後のクマ撃ち猟師と言われる姉崎さんが語る中に「クマは人を怖がる」という話があります。クマは獰猛で、人を見ると襲ってくると思われがちですが、実際はそんなことは滅多にないそうです。それどころか、クマは人を怖がるのだそうです。先ほど書いたようにクマは集落のそばに棲んでいるので、人の暮らしをよく観察しています。そんな中で、自分たちがいくらがんばってもビクともしない大木を、チェーンソーなどの道具を使っても簡単に伐り倒してしまう人を見て怖がり、見つからないようにひっそり暮らしているのだそうです。そんなクマが人を襲うのは、自分が人に襲われたと勘違いした時や、母グマが子グマを守るために必死になっている時がほとんどなのだそうです。こういったことは、他の野生動物にも言えることかもしれません。

そんなクマが北海道から姿を消しつつあるそうです。その原因は、針葉樹の植林によって餌となるドングリが実る木が激減したことです。そうになるとクマは餌を求めて仕方なく山から下り、町の近くに現れて駆除されてしまいます。山が荒れて食べ物がなくなり、仕方なく町に下りて食べ物を探す。この構図は神戸のイノシシと全く同じです。山に程よく人の手が入り、実りが多かった時代と比べると、野生動物による人的被害が全国的に増加しているという統計もあるそうです。

読んでいて最も印象的だったのは、姉崎さんの「針葉樹ばかり植林しても、そこには小鳥も何も住めない。そうするとバランスが崩れる。だから生きているものには、それぞれの働きがあるんです。人間だけが生きればいいと考えていると、人間も最後にはひどい目にあって死んでしまうと思うんですよ」という言葉です。私たちは、人の社会と自然を別々に捉えがちですが、社会も自然なしには成り立たないということを改めて教えてくれる一冊です。

タイトルの「クマにあったらどうするか」については、なかなか衝撃的な対処法が書いてあります。